

D. H. Lawrence の *Aaron's Rod* における identity と「移動の自由」としての citizenship

杉本 悠

1. はじめに

D. H. Lawrence の小説 *Aaron's Rod* の主人公 Aaron Sisson は、イギリス中部の炭鉱町で重量検査係として働いていたが、1919 年のクリスマスに突如仕事も家族も捨て、フルート一本を携えてロンドンに赴く。しばらくそこに滞在したのち、彼はロンドンで知り合った人々のつてを頼り、北イタリアを経由してフィレンツェに至り、そこで小説は幕を閉じる。本小説における移動と identity をめぐる議論はすべて、小説を Aaron の自己認識や自己発見の(失敗した)旅として解釈しているのに対し、本報告ではむしろ、identity を社会的な身元と解釈し、移動の自由と身元確認をめぐる、社会的な受容と排斥の力学を小説の中心的主題に置いた。その際地理学者 Tim Cresswell による 'vagabond' と 'citizen' という概念を鍵に、Aaron が築き上げた identity を用いていかに旅をし、そしてその限界に至るのかを分析した。

2. 移動の自由と 'citizenship'

Tim Cresswell は 'The Citizen and the Vagabond: Key Figures in the History of Mobilities' (2022)において、人々の移動における社会文化的側面を歴史的に検討し、移動者と周囲の人々とのしばしば非対称な政治/権力的関係性を、citizen と vagabond という相互依存的な対概念から論じている。citizen は移動の自由を与えられ、求められれば公的な身分証を用いて身分証明ができる者である一方、vagabond は身分証明ができない「疑わしい移動者」、追放の対象となる者である。citizen のもつ身分証はしたがって、個人の identity にかかわるだけでなく、ある集団に参加するためのメンバーシップとしても機能している。

しかし Cresswell は同時に、公的な身分証だけが人々を citizen / vagabond に分かつわけではないことに注意を向ける。人種、言語、ジェンダーなど、非-書類的な identity もまた広義の「身分証」として機能し、場合によっては公的には citizenship を与えられていても、実際には citizen として扱われない('shadow citizens')ということもあるのだ(36)。ある者が citizen になるか vagabond になるかは、当の社会集団に対しどのような identity=広義の身分証を提示できるかにかかっているのだ。

3. 時代背景とのかかわり

時代背景は、*Aaron's Rod* を理解するうえで重要である。小説の設定となっているのは第一次世界大戦終戦まもない時期であり(起点は 1918 年クリスマス)、そのことは冒頭から明示されているほか、トラウマを抱える元軍人やイタリア駐在の英軍人が登場するなど、小説は意識的に時代性を描いている。

第一次世界大戦は、様々な理由から人々の移動を制限、制御したが、それらはしかし、完全に戦前と同じ水準へ回復したわけではなかった。むしろ、第一次世界大戦を契機とする外国人に対する移動制限や身元証明への要求は、戦後も続いていた(トーピー(2008))ことに留意すべきである。終戦一年以内という時代設定は、小説内における「異邦人」が置かれる立場がまだ不安定であることを示唆している。

4. Aaron の identity と citizenship、およびその限界

以上の議論をもとに *Aaron's Rod* を読むとき、重要になるのは以下の場面である。ロンドンを離れノヴァーラへと至った Aaron は、自己にまつわるある種の「発見」をする。

In his mind was pinned up a nice description of himself, and a description of Lottie, sort of authentic passports to be used in the conscious world. These authentic passports, self-describing: nose short, mouth normal, etc; he had insisted that they should do all the duty of the man himself. It was his conscious mask.

Now at last, after years of struggle, he seemed suddenly to have dropped his mask on the floor, and broken it. His authentic self-describing passport, his complete and satisfactory idea of himself suddenly became a rag of paper, ridiculous. What on earth did it matter if he was nice or not, if his chin was normal or abnormal? (163)

ここでの'self-description'は従来 Aaron の identity にまつわる自己認識と理解され、'conscious mask'を床に落として壊すことはしたがって、自己認識が破綻したことを意味すると解釈されてきた(Chalk, 61)。しかし、Aaron がこの場面以降も自身の identity をもってイタリアを旅していくこと、そして彼自身が自身の外見や他者への印象付けに意識的であることから、本報告ではここでの'self-description'を、他者から見える自己について自身で作り上げた描

写だと解釈したい。したがって Aaron が失ったと思った「仮面」は実際には失われておらず、むしろ小説では一貫して、移動をめぐる交渉において重要であることから、この場面はイタリアに来て解放を感じる Aaron に向けた、作品中にいくつかある皮肉のうちの一つである。

自身で描き出した自己('self-description')としての Aaron がどのようなものであるかは、いくつかの描写から推測できる。まず、彼は外見が 'handsome' であると描写され(14, 35, 65, 106)、服装にも気を配っている。妻子とともに住む、自分で建てた家は 'perfect' と形容され(7)、庭の世話も自分でやっている(ただし家には隙間風が入っている)。仕事では炭鉱の重量検査係を務める傍ら、Union で秘書も務めているが、Aaron が労働運動に興味がない(56)ことを踏まえると、これは体面のために参加していると考えられる。炭鉱社会で円満に生活しながらも過激な労働運動は避ける模範的労働者としての Aaron に対し、国家は迅速なパスポートの発給で報いる(130)。

他方ロンドンや、果てはイタリアでも彼はミッドランド方言で話し、素朴な炭鉱労働者という出自と階級イメージを振りまいている。彼は住んでいた炭鉱町を離れたあとも、この模範的炭鉱労働者としての自己を自身の音楽の素養と組み合わせることで、中・上流階級の人々の興味を引き、彼らの間で生活していくことになる。

したがって Aaron に citizenship を付与するのは、この self-description を「身分証」(identity)として受け入れることができる人々、すなわち中・上流階級に属し、英語を話し、また特に Aaron が見せている文化的背景(方言と階級、職業との関係)を理解できる人々ということになる。ロンドンで交流する Bricknell 家のサークルも、イタリアで一時行動を共にする Angus と Francis も、フィレンツェで親しくなる Del Torre 侯爵夫人も、みなこの条件を満たしている。

彼らと交わるうえで Aaron が提示できる「身分」は、共通の知人としての Rawdon Lily であり、炭鉱町出身の音楽家という彼の自己イメージであるが、これらは英語話者のコミュニティでしか有効ではないという限界がある。また彼は自身の移動の目的をはっきりと答えることができない。移動の目的は Aaron が新たな人々に出会うたびに必ず話題になっており、移動者が citizenship を得るうえで重要なものであるが、この質問への答えを持ち合わせないため、彼は常に疑わしい移動者=vagabond とみなされる可能性を抱いている。Aaron の移動の自由は、特に彼がひとりで行動する際には、非常に不安定なものとなる。小説のプロットにおいても、フルートを失い、Lily が旅立つことによって、Aaron は次第に身分の拠り所を失っていき、最終的にはフィレンツェで身動きが取れなくなる。

Aaron が英語における identity 構築に熱心な反面、イタリア人たちには無関心である点も、彼の移動の自由の妨げになっている。イタリアで自己変革の可能性を感じた彼は、一人になると周囲のイタリア人を無視して自己に関する思索を始める。しかしすぐに彼は、乗っている車両を追い出されたり、letter case を盗まれたりして、幻滅することになる。語り手が 'British rôle (198)' と皮肉を込めて呼ぶ、孤独な主体が移動するという Aaron 的な移動モデルはプロットにより否定され、自己探求が阻まれるだけでなく、むしろ彼を共同体から排斥される vagabond へと近づけてゆく。

5. 結論

第一次世界大戦終戦からまもない特殊な状況下において、Aaron の組み上げた模範的 citizen としての 'nice' な自己像は、移動の理由を明かすことができず、つねに vagabond へと転落しうろ危険のある彼に、束の間移動の自由を保障する。一方、それを conscious mask と呼び、それを捨てて孤独な自己探求の旅をしようとする Aaron は、他者との交渉という移動の側面を無視することになる。これは自由な移動が成立する条件とは根本的に食い違い、最後には破綻するのだが、語り手はそんな Aaron を、皮肉をこめて描いている。

参考文献

- Chalk, Bridget. "‘I Am Not England’: Narrative and National Identity in Aaron’s *Rod and Sea* and *Sardinia*." *Journal of Modern Literature*, Vol. 31, No. 4. 2008. pp. 54-70.
- Cresswell, Tim. "The Citizen and the Vagabond: Key Figures in the History of Mobilities." *Swiss Papers in English Language and Literature*, issue 41. 2022. pp. 25-44.
- Fussell, Paul. *Abroad: British Literary Traveling Between the Wars*. New York and Oxford: Oxford University Press, 1980.
- Lawrence, D. H. *Aaron’s Rod*. Cambridge: Cambridge University Press, 1988.
- Papayanis, Marilyn Adler. "Italy’s Best Gift: D. H. Lawrence and the Ethos of Expatriation." *Literature Interpretation Theory*, Vol. 14. 2003. pp. 289-316.
- トーパー、ジョン 藤川隆男監訳(2008)『パスポートの発明——監視・シティズンシップ・国家』法政大学出版局。(Torpey, John. *The Invention of the Passport: Surveillance, Citizenship and the State*. Cambridge UP, 2000.)